

- 東日本大震災からの復興に向け、仙台市の井土地区では、新たな営農再開を志した農業者15名が**100ha規模の集落営農組合を設立**。
- 普及センターでは、**組合を地域農業のトップランナー**に育て上げようと、**園芸栽培技術の向上**、**販売力の強化**、**営農システムの効率化**の3つ支援を柱に普及活動を展開。
- その結果、**園芸作物の安定生産**と**ねぎの販路拡大**が図られ、**水稻直播栽培**や**ICTによる営農管理**が定着。
- 復興のシンボリック存在の組合に人が集まり、**地域コミュニティが再生**。

## 具体的な成果

## 普及指導員の活動

## 1 園芸作物の安定生産

- **栽培暦・防除歴に基づく栽培管理**を行い園芸作物(ねぎ、たまねぎ、ミニトマト)の**収量・品質が向上**



## 1 園芸栽培技術の向上支援

- **周年雇用ができる経営**を目指し、ねぎ、たまねぎ、ミニトマトの**園芸作物の導入を提案**
- **栽培暦・防除暦を作成**するなど**園芸作物の安定生産**と**効率的な作業体系の構築**に向けて支援
- 土づくりや排水対策等の実証試験を**調査研究**により実施

## 2 商談能力の向上とねぎの販路拡大

- **販売促進イベントや商談会に参加**し「仙台井土ねぎ」をPR



組合のキャラクター  
かえるのいとのすけ



- 組合企画で**飲食店との連携した消費拡大フェア**や**消費者との交流イベント**を開催



## 2 販売力強化支援

- **専門家を活用**し、主力品目である「ねぎ(仙台井土ねぎ)」の**ブランディングを支援**
- **販売プレゼンテーション**、**商談能力の向上**に向けた**研修会**を開催



## 3 営農システムの効率化支援

- 水稻部門と園芸部門の作業ピーク分散を図るため、**水稻直播栽培の導入を支援**
- 営農管理に効率化に向け、**ICTを活用した営農管理支援システム**の導入を提案し、操作・分析手法等を指導

## 3 営農システムの効率化

- **水稻直播栽培の導入**により、**春・秋作業の労力が軽減・分散**(ねぎの管理作業への労力シフトが可能に！)
- **ICTを活用した営農管理が定着**(GAPの管理にも活用！)



## 普及指導員だからできたこと

- ・ 高いコーディネート力と専門技術を有する普及指導員だからこそ、地域の課題解決に向け、適切なアドバイスを行うことができた。
- ・ 農業者から信頼される普及指導員だからこそ、農業者の生産意欲と技術の向上を図ることができた。

## 集落営農 100ha 法人の鉄人化計画の推進

活動期間：平成27～29年度

### 1. 取組の背景

宮城県仙台市の東部に位置する井土地区では、東日本大震災の大津波により農地や農機具等が壊滅的な被害を受け、多くの農業者が営農を断念した。このような中、これまでの個別経営から集落営農による農業経営への転換を図り、新たな営農再開を志した農業者15名が集まり、平成25年1月に農事組合法人井土生産組合（以下「組合」という。）を設立した。

県内の津波被災地域の中でもいち早く法人化を図った組合は、農地中間管理事業を活用して農地の集積を進め、農地の復旧とほ場整備が完了した平成26年4月から100haの農地で本格的に営農を再開した。

営農再開初年目は、米価の下落と畑地の排水不良等により、計画した収益が得られず経営は困難を極めたが、組合では、地区のコミュニティの再生の場となり、収益力を高めて永遠に継続する強い組合にするという経営理念を掲げ、役員・従業員が他産業並みの労働環境と所得を確保できる経営を目指すこととした。

当地区を管轄する仙台農業改良普及センター（以下「普及センター」という。）では、組合が経営理念を達成し、仙台東部地区のトップランナーとして育てていくよう平成27年度から平成29年度までの3年間、普及センタープロジェクト課題として取り上げ、支援活動を展開した。

#### 組合の経営理念（平成27年2月策定）

- 1 組合は復興のシンボリック的存在としてここに人が集まり、井土のコミュニティの再生の場となります。
- 2 豊かで肥沃な農地を取り戻し、安全で安心な農産物を生産し、顔の見える購買を通じて我々の商品が磨かれ、そしてブランド化することで、お客様とともに笑顔が絶えない組合にします。
- 3 地元住民の中から、あるいは必要に応じて地域外から若い担い手や女性の力を確保し、永遠に継続する強い組合にします。経営の継続と発展のために必要な収益は確実に確保します。

#### 組合の経営方針 ⇒ 役員・従業員が他産業並の労働条件と所得を確保！

- ▶ 水稻の低コスト生産 ⇒ 直播栽培の拡大
  - ▶ 余力を園芸へ
  - ▶ 余力を園芸へ
- ▶ 園芸部門の生産拡大 ⇒ 畑地力の回復
  - 水田から畑転換へ
  - 新たな園芸品目の導入
  - 実需者との契約販売
  - ブランド化

経営の軸足を水稻から園芸へ

### 2. 活動内容（詳細）

#### （1）園芸栽培技術の向上支援

普及センターでは、営農再開初年目の畑地ほ場で、唯一収穫・販売することができた「ねぎ」を秋冬採りの作型で導入し、夏場にたまねぎ、ミニトマトを作付することで、周年雇用ができる体制を提案し、栽培暦・防除暦の作成や品目毎の生産費や労働時間を算出するなど、効率的な作業体系が構築できるよう支援した。また、畑地造成工事によって整備されたほ場は、ほ場毎に地力の差や排水能力の違いがあったため、土づくりや施肥設計、排水対策等について、調査研究による実証試験を行った。



ねぎ作付けほ場

## (2) 販売力強化支援

組合では、市場価格に影響されずに一定の収益を確保するため、ねぎ、たまねぎ、ミニトマトは加工・業務用として契約し、JAを通して出荷した。一方で、主力品目のねぎを「仙台井土ねぎ」としてブランド化を図り、復興のシンボルとすることを目指した。

普及センターでは、ねぎのブランド確立に向けて、組合のイメージするブランドとは何かを聞き取りながら、パンフレットや販促グッズ、キャラクター作成について、ブランド開発会社から講師を派遣して支援した。また、ブランドを効果的にPRすることが必要と考え、消費者向けの販売プレゼンテーション能力、商談能力の向上に向け、研修会を開催し、独自イベントの開催、PRイベントへの参加を支援した。

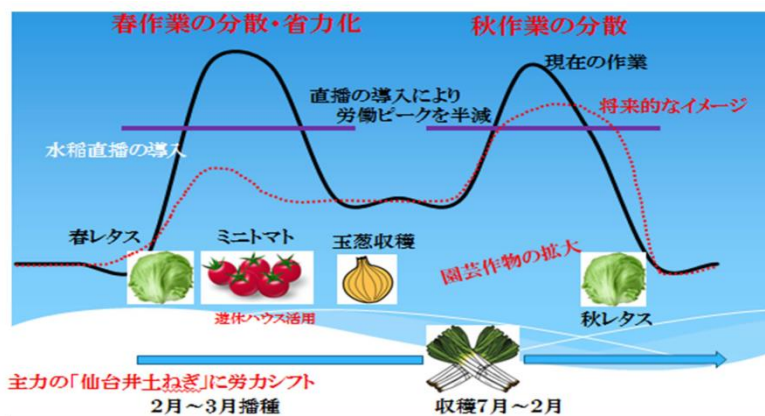


商談会に向けた研修会

## (3) 営農システムの効率化支援

### イ 水稲直播栽培の導入

園芸部門の主力品目であるねぎの定植や管理、収穫作業の時期が、水稲部門の育苗・移植、収穫作業の時期と競合することから、普及センターでは、水稲部門に湛水・乾田の直播栽培を導入して、育苗と移植の省力化と収穫時期の分散化を勧めた。特に3ha規模の大区画ほ場には、東北農業研究センターが開発した乾田直播栽培技術の導入と定着に向け、当研究センターの研究員とともに指導した。



←水稲直播導入による省力化のイメージ

直播栽培の導入により春作業の削減、秋作業の分散ができ、園芸作物に労働力をシフトできる。将来的には組合員が震災前に取り組んでいたレタスの導入も目指している。

### ロ ICTを活用した営農管理

園芸と水稲の複合経営となり、管理する100haの農地がフル稼働することで、今後、雇用を増やして労働力を確保し、効率的に作業に配分する課題が新たに出てくると考えられたため、普及センターでは、ICTを活用した営農管理支援システムの導入を提案した。

組合へは、県の支援事業で富士通株式会社が提供するシステム「Akisai」が導入されたことから、普及センターでは、園芸と水稲の労働時間や営農コストの計算など組合の課題を解決するため、システムの操作・分析の方法を指導した。



ICT活用支援



### 3. 具体的な成果（詳細）

#### （1）園芸作物の安定生産

ねぎは、平成 27 年度の作付面積拡大により、ほ場管理が行き届かず品質を落としてしまったが、その後、作付面積の見直しや栽培暦・防除歴に基づく管理を指導したことで、収量と品質が改善した。

調査研究で実施した緑肥作物の導入も、ほぼ期待どおりの土づくり効果が得られ、その後の輪作体系に導入された。また、汎用化された水田でのねぎの栽培試験では、同時期に定植した畑ほ場と比べて遜色ない収量と品質が確保され、水田でのねぎ栽培についても今後の作付計画で検討することとなった。

栽培品目毎に栽培暦・防除暦を作成したことで、年間の作業計画を従業員も確認できるようになり、効率的に従業員や臨時雇用者が動ける体制を整えることができた。



組合の皆さん(ねぎ選果場で)

#### （2）商談能力の向上とねぎの販路拡大

講師派遣や研修会の実施により、組合員の商談能力は飛躍的に向上し、各種販売促進イベントや商談会にも積極的に参加して「仙台井土ねぎ」のPRを行った。

平成 28 年に東京で開催された「全国ねぎサミット」では、全国有名産地のねぎと肩を並べるほどの評価が得られ、関東圏への販路開拓につながった。また、仙台市内の飲食店で井土ねぎの創作料理を提供する「仙台井土ねぎフェア」や消費者との交流イベント「仙台井土ねぎ祭り」を組合独自で企画・開催したことで、市内飲食店や地元消費者、スーパー等との取引も拡大している。



販売促進イベントへの参加



仙台井土ねぎフェアちらし

#### （3）営農システムの効率化

##### イ 水稻直播栽培の定着

移植栽培から直播栽培への切り替えを行った結果、3～5月の種子予措、は種及び育苗にかかる労力が軽減された。9月の収穫は作業が分散され、春、秋作業ともにねぎの管理に労働力を配分する体制が整った。

鉄コーティング湛水直播栽培では、は種後の除草剤の体系防除が定着した。平成 29 年度には育苗箱処理剤のは種同時処理技術も導入され、さらに省力化が進められた。

乾田直播栽培では、平成 27 年度は肥培管理と除草剤の適期を逸し、10 a 当たり 360kg の収量であったが、平成 28 年度は前年を踏まえた肥料選定と除草剤散布の適期を的確に判断したことで 10 a 当たり収量は 480kg、平成 29 年度は面積も 6.3ha に拡大し、10 a 当たり 550kg の収量を確保した。組合では、乾田直播栽培に手応えを感じ、平成 28 年度に乾田直播用機械を導入した。

#### □ ICTを活用した営農管理

営農管理支援システムの導入により、組合では当年と前年の作業量や作業時間の比較ができるようになった。日々の作業入力には正規雇用した若手従業員が担い、ねぎの労働時間やコスト集計、作業計画等に活用されている。また、データは平成29年6月に取得したGLOBALG.A.P.（グローバルギャップ）にも活用する幅を広げ、ほ場の管理履歴の確認、農薬や肥料等資材の在庫管理にも活用されるようになった。

#### 4. 農家等からの評価・コメント（農事組合法人井土生産組合 代表理事）

乾田直播の水稻は目標以上の収量を確保できた。ねぎ等も天候の影響で一部品質が落ちたものの、順調に販売ができています。売上げも1億円以上を達成することができたが、組合の経営を安定させ、より良いものとしていくため今後も頑張っていく。今後も支援をお願いします。

#### 5. 普及指導員のコメント（仙台農業改良普及センター 技術主査 鈴木智貴）

プロジェクト課題として支援を実施した3年間は、組合と一丸となり目標の達成に向けて歩んできた。成果として、今後の経営の継続に不安を感じていた組合が再び光を見つけ、自らの歩みを進めていると感じている。雇用も確保され、組合がコミュニティの場として再生してきている。今後も地域農業復興のトッパーとして経営が展開されるよう支援していく。

#### 6. 現状・今後の展開等

組合では、平成30年度に水稻の乾田・湛水直播栽培を管理する水田の約50%まで面積を広げ、さらなる省力化を進めている。園芸品目では「ねぎ（仙台井土ねぎ）」の周年出荷やブランドのさらなる認知に向けた取り組みを進めている。

一方で、園芸品目ごとの作付面積や労働力の割り振りに新たな課題が生まれており、営農管理支援システムの活用が重要度を増している。普及センターではシステムの活用を支援し、経営のさらなる安定化を目指して引き続き指導を行っていく。